キェルケゴール協会2017年大会ワークショップ「キェルケゴールの単独者概念の新しい解釈」（報告）

ファシリテータ　桝形　公也

本年の大会では通常の講演会あるいはシンポジウムとは形態を変え、ワークショップという形式をとった。その狙いは、キェルケゴールに関するあるテーマについて、提題者が、ある意味、片意地を張らないで自分の考えを発表してもらい、その上で、なるべく多くの会員が、やはり気さくな気持ちで、議論に参加してもらい、会員相互の意見の交換をしやすくしつつ、キェルケゴールに関する基本的な理解を深めるということをであった。結果的には、発表者からは、講演者とかシンポジストという立場ではなく、話しやすかったという感想をいただいたものの、初めての形態であったので、会員の内には戸惑いがなかったわけではないが、お互いに発表者の顔を見た上での議論であったので、全体としては親しみのある議論となったと思われる。

テーマに関しては、理事各位に諮り、意見を出してもらった。いくつかの提案を理事各位に検討してもらった後、今回のワークショップのテーマは中里理事から提案された「キェルケゴールの単独者概念の新しい解釈」に決まり、その内容としては大枠以下の4点に絞られた。つまり、a. キェルケゴールの単独者概念の基本理解、b. キェルケゴールの単独者と社会性、c. キェルケゴールの単独者概念の新しい解釈――キェルケゴールの単独者概念のキリスト教内からの批判を背景として、d. キェルケゴールの単独者概念の現代性、である。この提題内容に即して、各理事から、谷塚巌、米澤一孝、崎川修、中里巧の4氏が推薦され、最終的に4氏の発表テーマが次のように提示された。

谷塚　巌氏　「キェルケゴールの単独者概念の基本理解」
崎川　修氏　「キェルケゴールの単独者概念に対するキリスト教界内部からの

批判」（⇒「福音と出会う場所～キリスト教信仰からみる「単独者」概念の問題～」

中里　巧氏　「単独者概念についての新しい解釈あるいは現代的意義」

米澤一孝氏　「キェルケゴールの単独者概念と社会性の問題」

キェルケゴールの単独者概念は、キェルケゴール思想の枢要概念である一方、様々に解釈され、その「単独」という概念内容から、キェルケゴールに対する批判も数多くなされている。一方キェルケゴールほど「個」を尊重して、根本的な社会批判をした思想家はいないと言える。単独者概念のこの二面性をどのように解釈すべきかに関して、今回のワークショップは示唆多いものがあると期待される。

谷塚　巌氏「キェルケゴールの単独者概念の基本理解」

先ず、谷塚氏の発表は、このような単独者概念の基本的理解を抑えるために、キェルケゴールのテキスト、『私の著述家－活動の視点―ある直接的伝達、歴史への報告―』の「付録」を取り上げる。この付録の表題は「「単独者」――私の著述家－活動に関する二つの「注記（ノート）」」であり、この「付録」には、2つのテキスト、つまり「第一「かの単独者hiin Enkelte」への献辞」と、「第二「単独者den Enkelte」に対する私の著述家－活動の関係についてひと言」が配置されているからである。

最初のテキストは、「彼の単独者」という献辞を問題にしているということで、当然レギーネのことが想定されるが、谷塚氏はキェルケゴールの個人的な問題には触れないというスタンスを取っている。このテキストでは「大衆は不真理である」という言葉が6回反復され、「大衆」あるいは「公衆」に対する「単独者」の対比が際立たせられている。ただ、谷塚氏はこのテキストの「弁証法的」な論じ方に注目する。つまり、テキストは、「親愛なる者よ！」という呼びかけになっていることに注目し、これが「彼の単独者」というのは、具体的には読者のことであり、読者がこのテキストに対してどのように応答するかを求めているとする。そして、キェルケゴールの思想家としての課題は、読

者に対してキリスト者であれば、単独者にならなければならないという問いを突き付けることであったとする。第二のテキストは、キェルケゴールが自らの著作家活動の意義がここにあることを強調しているのである。特にキェルケゴールが「汎神論的混乱」と呼ぶ「政治体制の変革や教会改革に対する時代の要求」に対して、これはキリスト教の詐取であるとして、神の前の単独者であることを要求した。

谷塚氏は、キェルケゴールの単独者概念があくまでも時代の文脈と関係の中で提出されたものであり、神学的にはどのように評価されるかということに関しては、考察すべきものとして、問題を残している。このことに対する一つの批判は﨑川氏によって提示される。

谷塚氏に対しては、牧師になるということは、父親の影響で、ある意味定められた道、キェルケゴールという青年が社会の中でアウトサイダーになっていった単独者概念が形成されていったいきさつが連関している、社会とのかかわりの葛藤の中から単独者概念は形成されて行った、そもそも単独者概念が成立していった背景は何か、という質問があった。特に最後の問いに対しては、大谷長『キェルケゴールにおける授受の弁証法』（東方出版、1953年初版）第2章第1節「受取り手としての「単独者」」が詳述しているという紹介があった。

ファシリテータとしては、単独者概念の成立を踏まえての紹介もあってもよかったのではないかとも思っている。特に次の発表者の﨑川氏との関連で言えば、『我が著作家＝活動について』（*SKS*. 13, 17）で本文の「宗教的には公衆というものはなく、単独者のみがある」という文章にキェルケゴール自ら注を付けて宗教的な意味での会衆（信徒・教区民）（Menighed（congregation信徒団、集まり、集会）*1 は単独者の別な側面であり、公衆、大衆とは混同してはならない、と述べていること、更には、この草稿（*Pap*. X-5,B 289-14 / B 208）の中でも会衆に言及しつつ、勝義の単独者として使徒と士師を挙げていることなどは、キェルケゴールの単独者概念理解に新しさを与えるのではないか、と思っ

*1 *Pap*. XI 1 A 64, NB29 15 Menigheden（1854/5/5 以降）も読むこと

ている。

﨑川　修「カトリックの信仰の立場からの理解・批判」

﨑川氏は、「キェルケゴールの思想がどのような仕方でキリスト教と「結びついて」いるかを検証しなければ、彼の思想をキリスト教的なものとして受け入れるのは危険である」とみなし、「そのためにも、キェルケゴールの思想の盲点を探らなければならない」として、この目的のために、彼の「単独者」概念をキリスト教との結びつきで考察する。それは、「単独者としてのキリスト」との出会いの可能性を論じることである、という意欲的な姿勢を示している。結論から言えば、氏によると、「「本当に重要な問題は「キリストという単独者」とどう向き合うか、という問題であるはずで、キルケゴールはそれを正面から語ることを、はぐらかしているように思われる。」その論拠は、簡潔に言えば、キェルケゴールの単独者概念には「神の恵み」という肯定的側面、「神の恵み」の持つ共同的側面が見られないというものである。

﨑川氏はキェルケゴールの『愛の業』を取り上げ、ここでは、愛はあくまでも単独者が神を媒介にして他者たる単独者を愛するという構造をもっており、「愛される側」に立って考えるという発想に欠けている。つまり、氏によれば、イエスの愛は、今ここにいる具体的な苦悩する「その人」へと向けられ、その人を肯定する。これが「その人」がイエスと出会う場所としての「単独性」なのであるが、キェルケゴールはこのような「単独性」を奪おうとしているように見える、ということである。

﨑川氏への質問としては、①　改めてキェルケゴールの単独者概念のどこに問題があって、キェルケゴールが真の意味でキリストと出会い損ねているということになるのかということ、②　現在のテーマに即して、キェルケゴールと遠藤周作との関係を論じることはできるか。あるいは、キェルケゴール的な立場からの指摘として、③　キェルケゴールの単独者概念のポイントは、孤独、自己中心ということではなくて、単独者であるということが、自分自身である

ということと全人類がそうであるという二重の意味を持っており、それは親鸞とも同じ地平にあり、宗教にとっては決定的な意味があるのではないか、キェルケゴールは真の意味においてはキリストに出会い損ねているということに関して、改めてキェルケゴールの単独者理解のどこに問題があったのか。④　中間規定としての神との関係を持たず、人間関係という形だけでは、自我性の否定は貫徹できないのではないか、という指摘がなされた。

ファシリテータとしては、谷塚氏も言及していたように、キェルケゴールの単独者概念は、やはり当時のデンマークキリスト教界の現実批判、矯正剤という役割がどこまでも存在している。キェルケゴールにとっては、我々がキリスト者であるということは、どういうことであるかということを徹底的に反省させる装置としての単独者概念の持つ意義を、一方では考察すべきではないか、という思いをやはり持たざるを得なかった。

中里　巧氏「単独者概念についての新しい解釈あるいは現代的意義」

中里氏は「キェルケゴール思想における「単独者」den Enkelteをめぐる新解釈あるいは現代的意義について、紹介する」。自らのキェルケゴール研究を「精神史」という手法として確立し、その上で、キェルケゴールの思想をどのように継承していくかという問題意識を踏まえた上で発言。新解釈というのはこの意味で、単独者概念を次世代へ継承しようとする際に不可避的に出てくるものである。キェルケゴールの単独者概念が持つ徴表を現代の文脈の中で見出せるのは、例えば、「ホームレスの人々・聖愚者（よう狂者）・修道士・高齢独居認知症患者・悪性腫瘍終末期患者・自閉症者・いじめ被害者・貧困者・知的障害者といった人々であり、とりわけ現在要介護度５である実母をめぐる日々の体験から高齢認知症患者や老人介護施設入居者」と言った人々であり、このような人々を通して単独者概念の刷新（新解釈）を提示するつもりであった。しかし、キェルケゴールの単独者概念の徴表に注目した場合、現在中里氏の大学における状況に対する反省を通して、この事は可能であろうと考えた。

無反省的な絶望的無知、現代におけるキェルケゴールの言う非本来的な絶望

の危険性を、アイヒマンを例に出して、説明し、今日の教育的環境においても同じ状況がマスメディヤなどによって助長され、大学人がそれに加担しているのではないかという懸念を表明。現代の我々は単独者としての可能性があるのか。これに対して、中里氏は、「私たちは、単独者なのではなくて、もはや単独者の廃墟ないしは断片に過ぎない」とし、もしも我々が単独者としての在り方が可能だとすれば、この自覚からしかないと主張する。

米澤一孝氏「キェルケゴールの単独者概念と社会性の問題」

キェルケゴールの思想全体の社会性というテーマに対して、日本の社会学者の山田昌弘氏と精神科医の岡田尊志氏のキェルケゴール観を紹介している。前者はキェルケゴールを「現代で言うオタク」、後者は「シゾイドパーソナリティ障害」と診断している。これらの人たちはキェルケゴールのレギーネとの関係を基に自分たちの見解を打ち出しており、米澤氏は、これだけ見れば、キェルケゴールに社会性を問うこと自体が間違っているように思えると述べている。米澤氏はキェルケゴールの思想全体の社会性ということをテーマにしているので、これら二人の解釈は、現代にはこのような見解を持っている人がいるという紹介になっている。

米澤氏はその後で、有名な経済学者であるドラッカーのキェルケゴールに関するエッセイを取り上げ、彼のキェルケゴール観を紹介することによってキェルケゴール思想の社会性との関係における意義に光を当てようとしている。ドラッカーによれば、真のキェルケゴールとは「もっぱら宗教的経験に関わる」キェルケゴールであり、このキェルケゴールこそ「苦悩する現代社会にとって意味が」あるということである。その意味とは、19世紀以降、ヨーロッパでは、「社会」が前面に出てきて、「個人の実存や自由の存在」が否定されてきたが、それは「永遠は時間において達成できる」という楽観主義に根拠を持ち、これがかえって20世紀の全体主義を生むことになったのであり、キェルケゴールはこのことを予言していたのだという。米澤氏によれば、ドラッカーは「社会に背を向けているとされやすいSKこそ真の社会的な思想家である」としたということになる。さらに米澤氏は現代のスマホ社会においてキェルケゴール

の思想を受取り直す可能性に触れているが、ドラッカーの思想に対するキェルケゴールの影響や、二人の関係を論ずることが「単独者」と「社会」との関係を新たに考察する可能性を開くのかどうか、これら二つの可能性の考察は今後に残された氏の課題となるだろう。

米澤氏に対しては、ドラッカーの思想にキェルケゴールの影響はあるのか、という質問が出されたが、氏は、これから研究したい、ナチや全体主義的な動向が生じたのは、キェルケゴール的な視点を忘れてしまったからではないかと思っているという予想が述べられた。

その他、フロアーからは次のような意見あるいはコメントが寄せられた。

単独者から発展させるということに関しては、ドストエフスキーの方がその可能性をもっているのではないか。ドストエフスキーの場合は反抗する単独者というようなものが敗北していく物語であり、決してこの地上の本当に虐げられた人々との結びつきというものを決して失っていない、キェルケゴールもドストエフスキーもそれぞれ歴知的地理的な制限はあるものの、両者の結びつきにこの問題に関する考えの可能性があるのではないか。

キェルケゴール自身が牧師になろうとしていたことと、単独者概念との関係をどう考えるか。

ファシリテータとして、ある種の総括をさせてもらえば、

「単独者」と「社会性」とを対比させたとき、単独者批判としては、単独者が共同性のない非社会的なものという形で展開されよう。キェルケゴールの『愛の業』もこのような批判に対するキェルケゴール自身の回答となるかもしれないし、キェルケゴール自身が共同性を自覚していないわけではなく（使徒と弟子の関係あるいは会衆への言及）、彼のテキストの中にもう少しこの問題への研究を進める余地はあろう。しかし、一方、社会性がキェルケゴールの批判する「衆」の集まりということと理解されるならば、キェルケゴールの社会

批判は根本的で説得力があり、彼自身の新聞論説やキリスト教界批判は、まさにキェルケゴールの「社会性」を意味していると言わざるを得ない。今後とも「単独者」の「社会性」に関しては、この二面性を考慮して、考察していかなければいけないであろうし、現代的意義とすると、むしろ後者の側面を、ハイデガーやヤスパースとは違った形で、今一度検討してみる価値はあろう。

共同性ということに関しては、来年度のシンポジウムが「ルター、キェルケゴール、カール・バルトにおける聖書と教会」というものであり、議論の深まりを期待したい。

ワークショップという形態を取ったのは今回が初めてであったので、参加した会員に戸惑いがないわけではなかった。しかし、最初に述べたように、発表者からは片意地張らないで発表できたということ、フロアーからも発言がし易かったというコメントを頂いたので、今後も、例えば、発表者の数を少なくするとか、もう少し工夫しつつ、このような形での議論があってもいいのではないかと思う。

最後に、江口副会長には、会場を設定していただいただけでなく、参加者全員が車座になって議論するという、これまでにない形態となったために、会場設定等で大変ご迷惑をおかけしてしまい、ここに改めて、謝辞を表明したいと思います。

Workshop Report: “New interpretations of the concept of the single individual of Kierkegaard”

Kinya MASUGATA (Facilitator)

In the past our society had held lectures or symposiums at the plenary sessions, but this year we changed the style for a workshop, because we wanted to have a more open or frank discussion at the session. As a result, each speaker could, on the one hand, easier present his presentation than a presenter at a symposium or a lecture, on the other, some of participants enjoyed the discussion by each other’s faces.

The title of this workshop was “New interpretations of the concept of the single individual of SK,” that was proposed by Mr. Nakazato, one of our society’s directors. The speakers were: Mr. Tanizuka, Mr. Sakikawa, Mr. Nakazato and Mr. Yonezawa. Mr. Tanizuka introduces the fundamental meanings of the single individual by SK, Mr. Sakikawa criticizes SK’s concept of the single individual from the viewpoint of the positive side of the individuality (Enkelthed) with “my” encounter of Christ or “my” solvation by Christ, Mr. Nakazato emphasizes the importance of our consciousness of the single individual in contemporary academic situation in Japan, and Mr. Yonezawa tries to appropriate SK’s concept of the single individual and his critique of society, the mass as the critique of our age with the experience of totalitarianism.